1081
3

門へ 18
1089
巻 3

伊丹與

宮城県図書館蔵書

金玉福ぢ　おきく巻之三

女訓乃上うの序

君臣父子夫婦兄弟朋友の和したがひ聖人色を慎ことはくるあひそんれ情べきを道なり
然ども色を婦ハ色をもつてなきバ名分大
うしハ君ハ臣乳ハ臣をたりうべ父ハ子の
義あるくるハ新へ夫ハ婦ハ義ハ夫ハ婦むつまじ
うして朋友いつまてそれ人ハ人倫を具
見するとて人倫ことのふ若をそれをこと
す附ちく新ハ新ハ　たうをしの中記を

朋友たちをあつまらせむつまじくして
諸道除穢する事雖一年日向乃山
やうこうの山の麓のあいの山にて一山残
まなくばうるはしきのみ繁茂きて一
郡代人皆濫を抑て舎の耕作となるべ
こうまこゝを山ひろふしてうさぎすす
事なり殺るの奥山に到りてハ這けい
しくこゝか流ちくひ深さうの
海さかうちやうれ西をこゝのうるとみえん
れバ別てあの樹よくほこへ枝葉ふ

て一ハうるはしきふ山ふ及へたり殺れこをた
たくゆれハ皆人うるとなし諸よくへの
動くこゝ海面西れバあの樹よくみちてこき
こ殺ゆう濫まこあ人しみ岩ふなこれ
て山ハさあこゝゆあのこしは屋ふ安れ濫つ
こうふ濫うさ奥山へ入て岩川の濫きの
すうふたさなる濫へ元はこゝてうゆをた
としねゆう梅仕男水藻をゆねきバか
の藻を求んるゆ水屋へ入るふ
こやハまつふ皆海のうへ色ね

山くより面ハなるゞま目ハうゝうきま
て住居ハるゝ清水ハさびく流れあゝ
清こゝろハ下ハあゝ安れ多つたきゝ怪
人ハとゝさゞ家ハをを見て同国へハ
一枚清ハ水ハ有て八其ハ性そんぢゝ
対ハ水の庵ハ年数を経てうゝ北清ふ
なゝ年ハをいるとれば其ゝへ毎日大分
の清をハして暫時のゝふ大瀧をハ来し
ねを下の者ゞをせうやうれうゝをいゝ
て初ゝとゝくゝ事数を立ゝう別て

年十三歳ハ年ハのゝをゞてんゆゝす数日ハ
つゝて見ゞ山へ行ゞバ毎日其跡をきゝい瀧
ゝ庵ハ庵ハゝをゝ月ハゝうハをを見て
同国へハゝ一ハく大分ハ瀧をのゝけゝゞ見
安れゝうをを初りて知てゝさまハわりひ多
く四番をゝゞゝ一きいゝくをおゝて大き
なゝ弱ゞゝらを抱へ角いゝこゝハ重ゝ瀧を
ちゝばゝ抱ゝ生ゝうゞゞくけゝゝうハ仕立
て住居の水の蔵会へゞゞ逆まく水ゝ
わのきゝうゞくやゝに仕ゝけ服へハきて

さとられぬべきものの岸のかハ樹まれい蔵てあの
臍さ剛の蔵ふはたゞやゝ弱のきさをはべ
まのこれ出てゝ水ようゝ出すぎまゞさ
いばりとなし一あんぜゝくきそをゝんて
猪の大蛇とれうきはるゝざるゝーゞえ
高ゝつれのきゝ猪ゝゝん来を強ーたるふ
ふゝらんで剛のゝゝ屋ーにゝの弱
ゞらあ毋りけゝうふこーらゝー極人
れとハれりつきゞゞ我あゞゝれゝ強ーく
なりて真弓をそをはるゝずそれゝり象



へ毋りて強くれゝバえ我こーらゝくさを
作り和そを塩ゝを来ひの刻ゝとりひ
又作て刀きゞゞを大ゞやゝるゝゝゝうごりて
強ふ一ふのまれんゝする猪なきバこゝく
さよ死毋ゝすあゝゞゝゝれゞをそこ
なる陳作和ゝゝゝゝれ和バあ
まゝせん言なのゝふゝ人よ強ゝゝゝゝ
ー行ゝ刀きゞゞ強ゝらふ猪の性八
て申ゝ急ゝるゝ人ゝをゝゝゝゝ猪あ生
よ剛八ゝふ毒れひ勇れゝくなる

毒気たちて若そふ物ゝくものハあるひ毒
物ひとハ死にさきバ佛乃法師ゆをこん喰
病の三門を切て三毒の大ゞやみたとへ法
ひゝゞ今ゝこゝろをそれ物ゝくさ藥を
ゆせ毒くれのまゝゞ五ん事みれ行みひろう
ろんこせゝこん弱の仏法ハ大ゞやみ魂と
なれりなさ毒いいるみ悟ひうゆゝゝを見
付ゝ時たとへこゝろ新せて藥をそ
見事一毒みゆを食せこゝろみ毒貴ふ藥を
ハたゞゞらをれて藥さんこたゝみゝゆふ

きゝ毒ふいろこをハくね毒しいあゝハハ
仙妻を毒くせいハ耳ふ毒をゆゝうありて求
代まて代人名を弱ゝ今代ハうハ見事
ふ物の貧弱ゆへふ一毒人毒名をなゞせう
せゝみを見事地人の悟とくバれうう藥
人ハ大ゝ妻子ふまゝうきて思ゆく
の懸をりすき見事代中ハ行のゞゝう
こふなきゝ是文倫をゝ代みふあゝバ
新ゝふ風て物れゝ一毒見事ふゞる
ん弊人なる人ふゝバ解く悟ゆ人を教ゝ

## 城の伊澄のかゞ事

七尾憲信乃かゞせう城の伊澄和十二屋
ゆて殿様へ百姓されし一万石の三分あづけき
金を御所へ上ゆて御ちさみ多ゆ城ゆ天乃
なせる二霊仙人なのきこゞゆや世ゆたゞひなさ美
男けんとうてうあいの御ゆ常信をさせてハ
り一気づまるとゆて家ひりやあんと三人
のゆこ員を生て悪魔の時ハ下位一きく下
猪乃毋へ孝乃をつくさせ魔をあさへ出ゆを旅
して我乃城ゆをもくへまゞを行ゆ来ゝ一行

へ乃上ゆ国よりうう業乃の種ゆや一番の
人民貴となく貧ゆく老ゆく若とと
なく愚となく智ゆく男ゆく女と
あく一ゆ伊人ゆ地を見一りのいまゆ行
のゆりひふ腹をこゞゆうあうね立ゆ行
あゝとふ立ゆ中ゆふ悪ゆ魔ゆう若ゆう
蔓中ゆこうゆりのいうゆ伊場乃見ゆや
伊人をこひひびてなゝゞの家のひこう
神ゆどゆのつゞう男ひ乃出を伊こゞゆく
腹ゆへ伊ゞう毋れゆりを立う行き

ごとき五月八重なるいろいろの花のて
う愛ふうくいうでして思ひたくなんゆと
ばうるとき　ごとくれの後をなげき
バ何のこうぜせやしばらく人乃あ来こうふ部
決女なりうるこ孫ア一女いろくこと
をつの中一ちの人くふきのこの地をつそ
養さうやさふ一ふるどうれふ人でなれ
つこ後ふいあ人くよう義こハ子をたれる
なくハ源ふ部ひ姫一ていうこ五へ
ていあさきふどん源をんるけみう部姫

げ一をてふうけて今ふうけ一部をひ
こふやうをようひねこ様一くあうき
ぢくふいう姫ふをうをぐれあ
来よう一番ふ部ふ死一てわと思ひ
の二月をあ一せやハ部源ふあこを
あうきこれるひきれてくを後一月ん
人ぢ週向ゆを部くハ事を姫姫の
霊をやハて二世の部ひ何事う部ふ
ふうんこ部ふ後ハ部ふどうむるをなくた姫
ふ勧後りいうをき姫ごゆんぶ部ふ

こゝてあこくをれのらばずいぶん情をうけ
しうべきものいよく情をうけなく侍
こゝろ月野ひのもとを発せ給ひたる元孔をみく侍
きこゆる対小弟ふるこゝを加ふ侍情の人乃て
ふうるとて春こゝろくん令下えり此彩ひ
なれば一業はあづさをいふ侍ありて肖
屋を家くこゝを二人のもと同室家前場を
はかれずこゝに仏のうらをなふいこゝ母
月日をるを世くあるが侍常のごとく清
立一業をこゝてはりこゝひをよく侍

てあるきバ中小細字ふうきたるものあり
細くたちてあるこゝろきバ業べてこゝをよ
むか里ひの家れこゝゆるばうるこゝ書こゝあ
しうべ侍風対小梅く立一て二人れもこ同か
ふ色をこゝへあげ侍人我牙恵養ゆべれ
ごゝれにうゆ世て役人たるれのくれ情言
会こゝをなるべきこゝくゆ毒人ありこゝ
く作こゝれゆうゆうの半左二人をまか
が家こゝて自をこひ一元孔の程ハ色
しうごゝをふ半ふへあげあバこゝて

うたは墨うりして雑少して撫るべし
其うへいろいろハ一國名所旧跡なれバ函
中ハ女わらんべさへめで悲てふをいろや荘
年の男さうるふ はぐ身をひすまし一を
夢ゆめなりばてまりふ俳ゐれしりの
なれハ多ゐ みたの分の縫屋ふ多後城
ムラへて出腹立ものを出うなぐ代表
をうへやあげてハまみ年いく絵うさ目ふ
ありんをとれぐさ——其うへうさ北形の
うつてうさふかきゞ悲ひねうをあくうゞ



くく私ゞをさへ仕さあふすまバはうを
なふすも年其うへ海ハこあさの出多来
かきバ死霊中ゆをを過殺なうをふ
乃まくふ行ひうへ色へうへ作ってれんハ多後
北年なうこいへバ伊藤いよく服立して
鬱中ハ様ゝ身北うへふあやーさ年あゝバ
たうへかてひうをはせんぐを差ゝうゞさ
役人北其の職をちうと行ってう報の年を還
て行ん寄ふをてうありんこハや終味の初う
何ゝをゞてん年ゝう罪——様ゝハ君の出学

聖源きれいもれいて私なり一世せん
は屋それ〳〵重よりあげ代目〳〵を孫
りぬ下やあ〳〵ゆべ〳〵わの、ゆを考り法へ
と袴をちやく〳〵ゆるふけきバニ人はあるて
何ゆくかごふ深ひ登城すいりり出ニ和へ
あてたの毒をゆよれバけるえ後立陳う
ばいうやうとを作ひやうを作御ふそうい
ゆへのよ〳〵いろ〳〵ゆるみきるハ私ひとら後
ナ御れあ〳〵実をうをせゆへゞをしゆゞ
ふ袴をたゆ〳〵ゆるえなくゆへバけりの

れうぐをかてやいあの利益を試交り一不
ゐをーぎれべいこを南を南をなるち次第こゆ
傷をこゑて屋鋪へ帰り今日明るハーゆう
ぢん日なれバ明後日ゆ帰るころすべきさり則ち
帰るあさなるのあ〜実をなの面〜れおー
こぐやをゑんで弱〜みを合せまゆハ
雀ぜん此柿の古木へうゐ結ぶせさて吉兵
ハ家老ふいひ付度二人ぢよこ見をほるん
ゆてたきよりてなーー強よ者ゆハれのく
あをは芸分ぢうこんはあ人ぢれさーー郷を

ゆるこさぐ稼まの〜ぢよろふあゲーーゆされ
んをうーー吉原ハ若ゆよ先ーー行人
こえあり吉兵衛さなきバ山陽の孫
柿を側へ家者ゆ吏陽の数をつてき
ほくふゆてなーーきれどを二人ハろて歯
ぢくなるぢさてく形ふ似せね憎をーぢ
さぐゆて今ハゆあを姿ばるをふまゆ
ーをさぐ後ふ思ゆんと色を見
果憂さう白つきてゆくほるんを
ちあぐろうーを伊藤二人ぐさぎんぢれて

[illegible]とこうづくかさ掛けあるくさーこ
なくくくやづしいろく地さまれ神をあらはし
[illegible]くけくをこうせべえ分仔細又百万
石の領分小菊つゆさまあ志がうちれ聖人
をもを親金の家しあうあひあり頼の男又
なれハさらにげ二人を堀をうづれいうきゐ
ゑハ親小つきてこうあけ代きが千金
ゐを笠うしおうとこと結を脇を守くさ
つとちをけすきてあ神なくく碑ゐきれ
をいうう今すこーとこいきれづを二人

とりゐ前後ゐゐの神ゐ神をよびて垂
に其ゐ毎ゐ其ゐをゐ蓋りせさてこゐハト
くまでを縁つとこと体ゐ後ーーとやくゐと
いひ付ゐを[illegible]けんこびまるて後ほてい
せんれ右すの如くゆきまゐゐ河をうり
さ神やけさよくれ雑ゐ毎ひさざきて情
ちくれとれば一つくん何ゐさてゐゐごみの役
なれバ我をたゐ神ゐれりゐ人をゐゐもゐを遊
神ゐ一紀れごを世ゐれとるを行ふ毎う
こよくれ吟味つよく二人のよこ同の字を

こゝひ〳〵やとれば情をかくべき後をなの〳〵ゐつゝ
地ゐつゝれ屋ハ稼をみてゐるとを聚
水みねえん御とゝ見庵〳〵更の御ふた
きなく當るやゝ可愛ありりまし〳〵あい
さうを尽〳〵ゝ行ゐんと思いまゝをさき
ゐちうゐてを孔福やへ入まえ若なすべ
さ前尾なゝて稼をみうけてゐうし
なバ未来ハかゐゐ見れ見けいやゝ〳〵れ
ゐをそてれゝひをゐねゐ情ふ事和愛
ゐを〳〵ゐを更ゐ〳〵ゐまし〳〵さとれゐ後〳〵さ



ゐよ者を物ゐひゐゐゐさゐの義ふを
なく同ゐみゐゐばゐゐとなれバはや夜
を中りね三て弥縫れ三ゐの間よ
縫ゐ夜ふりゐうゐぜさせゐ弥の月をかさ
ふゐさ八ゐれれの別れをりゐ稼ふ
ふ縫る御をゐねくふゐみて又育乃
ごゐくふ稼の古ゐへいゐ一ち三ね二人
のゐこ同バ父部の太ゐふ二月弾〳〵て共
月を中ゐく月ゐて紀ねまゐゐをゐれ
情ゐてゐバふ元まひ〳〵て稼くをつけ

たゞさのひ二人ふチろ舎のつゝ大ゐのれハとゝう
鶴ゝをあゝよたてゝくゝ油ゝ〜なれば
とて元きひ元ごまのまゝ美ゝれなゝばゝとゝれ
ゝり二人れよゝこ同色沈ゝ小畜をたゝて
きバ毎ゝ元田ひけまゝくゝ小性ゝうけ〜ゝゝと
神ゝ名ゝるれゝ来ゝ人ゝるてゝそ後ゝ上ゝ国りの
なゝ〜りゝやゝゝ元ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
みゝりゝるハいゝ世ゝのはゝなゝこゝゝ御ゝふゝ川ゝ洞ゝ
を文ゝうゝなゝのゝてゝこゝう世ゝふハりゝきゝけゝ
りゝやゝこゝひゝゝ今ゝゝのゝいゝゝゝゝゝゝゝ明ゝるハ前

尾よく命をたすけ給ひなばべし
他国にてながらへさせん今の情をうけまいらせ
まうさむと則ち逃れたまふ手下に一人二人手下
縁にも縁ありしその妹の節のなげき
をなしたがひ事なればいとゞかなしさそれより
雑人の情に門の世にかくれすまひけるを思ひ
分をさへくれなみあらはれ縁ばけつく思
ひはあはれもいふべきことなき命助かる別れにて
まつり来の閨縁をたがひ正して世に忍びて
みづから世をはなれたるをあはれんで又いま





縁のなきを掛るは悦びの彼にかゝる掛ひ
けるに又一度目にはなきにこゝろさし
に縁をかるはせ土壇をとらへ命やくせ
をれあはせば家老城刑部にまかせけるはこれへ
又りし此執心を受けて情をうけれバ名別
の主一罪にあたるの例をきかずそれ京
縁にハ是ほど申さどうふ縁なし只今
彼をころし給ふ世の死をさとらし
かゝまじ此れ後ハたゞ人に成りて孫ども
情を上げる所のなりけんや其身にいかゞ

ざうと情なふていたのりうばをふ始
はせ給へこれ二人のよこ目色ぞを力よ
いうくこわびこれ伊勢あやまりたる風
情して神八一筋よ者人の物と大切ふ思ひ
人は待をうくわりかえず殺さんとありひ
うどもはあ人の作りざー雑ーはうへ
やりかうこをもこれ二人は此をうめべー
こをもの前をよろこ一きさにそうくこいへば
他ういの命ーあをこれ字て此人ふ思もけをなる
ふ和ひてハ人合流事対ずて此前ー ふこう一ふ



を遂ぶ此ぜ事あふうれなく梅色いろハ
形よにせね情ちうびを行の色でのこうれ
ー男女色色をさん母ー元くふ待ぎれハ
事ふ他ふ思ひて此時を周さてくふ殺まれる
情ふりを世こふ有くけさする事此はハ
さふのとト前の幼の虫ーさハ有ー次第ふ察
二人ふ云分すきバ御ふ婚ふ者ふ弟ふ嫁
くふ御ふ人一大形ふ時きバ百ふ人ふ内ふ
弱ふそ一ふ事をざさ流ふハ見伝の事入婚ふの
いうと妻ーくいうふあハ切梅くさせは

まあとたづさらきしゝ[illegible]をなくて
[illegible]ひさうを聞めくりはやく越後へ立ち
ありけれあゞ葬ちるかあり[illegible]死[illegible]ゆて[illegible]ゞらを
とげ三人目ド者の[illegible]ゝ人呆ね後あハけん
信を[illegible]ありていろうゞ悔を[illegible]くかんし
行ゝゝかゝ性をこゝろせ一ゝて[illegible]後悔[illegible]
一とし物よ事ハ密を[illegible]てなる物ハ[illegible]に
を[illegible]て破ゝて[illegible]ゝ人の[illegible]一ゝみゝんを
こゝゝゝ年とれゞゞ人[illegible]ゝ
年玉福ぢゞゝ三[illegible]